

浄土

1979-7

昭和十年五月二十日 (第三機郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和三十四年四月二十八日 通巻第 (特別送付部外誌) 第三二五号
昭和五十四年六月二十五日印刷 昭和五十四年七月一日発行
第四十五卷 第七号



(お)(ほ)(ん)(の)(秀)(句)

病んで父を思う心や魂祭

(正岡子規)

灯籠の火消えなんとす此夕

風吹て回灯籠の浮世かな

× × ×

灯籠をともして留守の小家かな

同じ事を回灯籠のまはりけり

おぼんの風物誌、灯籠を季題とした正岡子

規(一八六七—一九〇二)の句である。前の

二句は明治二十六年の作、後の二句は明治二十八年の作であるから、子規二十代の後半の作品である。

子規の生きていた頃は、仏教の行事は一般の民衆によく浸透していた時代でもあったが、もとよりおぼんは今も昔も変らぬ先祖供

養のためのゆかしい行事である。従つて、晩

年はとくに『病床六尺』の詩人といわれ、「六

尺の天地に現われるものを貪婪にしやぶり尽

くすことしか許されなかった」(山本健吉評)

子規の限られた世界ではあつても、そうした古い伝統の習俗は、よく行なわれていたようである。

おろそかになりまざる世の魂祭

生身魂七十と申し達者なり

家族従者十人許り墓参

冊経や小僧面白そうに読む

施餓鬼舟はや竜王も浮ぶべし

いずれも明治二十八年の作句であり、『寒

山落木』巻四から抜き出したものである。子

規の俳句といえ、ば、「朝顔や我に写生の心あ

り」とか、「樽柿を握るところを写生かな」

などの作品にもみえるように、まずは日本派

の写生句を創唱した、その俳句の創作技法が

想起される。しかし、そうした技術的な問題

に関わりなく、前掲の諸句の魅力は、まずも

つて平易な描写の中に、日本人の伝統の心を

よく写し取っているからであらう。そして、

「病中」と詞書きのある、

病んで父を思ふ心や魂祭

の句に接すると、子規その人の行なつたおぼ

んの精霊回向を、深い感慨をもって追慕せず

にはいられなくなつてしまふ。私は、この句

と並んで、「母の詞自ら句になりて」と詞書

きのある「毎年よ彼岸の入に寒いのは」とい

う句が大好きである。父母のことを想う子規

のやさしい慈愛の心が観取られて、私はとく

に、上掲二句を子規全句中の最高の秀句と

するのである。

七月号



いよいよすべからく雑を捨てて専を修すべし。

——『選訳本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.37-8)

目次

菩薩の詩

—忘れ得ぬ井上多喜三郎さん— ……牧 達 雄……(2)

インド・ネパール 旅塵集……………木 下 隆 一……(6)

<民話シリーズ> 竜神谷の供養塔……………谷 川 のぶ也……(18)

<連載>

六時礼讃の「無常偈」に生きる(4)……………安 居 香 山 ……(10)

善導大師の生涯とその教え(8)

浄土変相……………(14)

特 別 寄 稿

「天正山西方寺縁起」について……………橋 本 洋一郎……(31)

<読者の便り>

手術後の無意識とその周辺……………吉 田 勇之助……(30)

法然上人の弟子たち①

津戸三郎為守のこと〔七〕……………梶 村 昇……(23)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

<表紙裏・巻頭言> おぼんの秀句

念仏ひじり三国志③ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄 画

カット 大正大学美術部

菩薩の詩

—忘れ得ぬ井上多喜三郎さん—



話しは少し古くなるのだが……。昭和三十七年五月二十日、一基の詩碑の除幕式が行われていた。

ところは、滋賀県蒲生郡安土町、西老蘇の小学校校庭の一隅である。

その詩碑には、井上多喜三郎さん（人びとは親愛の心をこめて、多喜さん、多喜さんと呼んだ）の詩が刻まれている。

私は話したい

目白や きつつきと

熊やリスと

きき耳ずきんなんか かむらないでも

まき
牧 達雄
たつ ゆう

東山学園高校副校長
浄土宗スカウト連合協議会
副理事長

私のおもいをかよわせない

もろこや なまずに

亀の子や 蝶々に

降りそそぐ 日光の中で

やさしい風にふかれながら

つばなや たんぽぽと

ゆすらうめや あんずと

なんという美しい、ほのぼのとした詩だろうか。その日、会場には、多喜三郎さんの恩師堀口大学先生を始め、詩誌「骨」の同人、近江詩人会の会員、そして多喜

三郎さんを慕う多数の人びとが集い、心からの祝福をおくっていた。

蓬髪が多喜三郎さんは、紋付姿で、人なつこい温顔を一層ほころばせ、細いやさしい眼を一段と細め、おごりもなく、へり下りもなく、素直に全身でよろこびを表わしておられた。それを見ると、人びとはみんな自分のこのように喜んだ。

美しい、和やかな光景だった。堀口大学先生は、

「井上多喜三郎さんは、人の善意を詩いあげる数少い詩人である。その点で、我国における現代詩に一背陵をなしている。」

と、その詩風を賞讃された。

多喜三郎さんは、老蘇で呉服商を営み、その地の浄土宗東光寺の総代をしておられ、信仰の深い方だった。私は、東光寺さんに関することが機縁となつて、昭和二十六年以来多喜三郎さんと親しくして頂いた。多喜三郎さんはその後何回か私の自坊に尋ねて下さったし、私もお邪魔をした。未熟な私を授戒の勧誡に迎えても下さった。時には京都の市バスの中や、国電でお出会いし、風呂敷包みから、親交のある方からの便りや、人形など

を、次から次へと出して楽しそうに説明して下さった。

詩誌「骨」の何冊かをいただいたのも、大方こんな時だった。また多喜三郎さんのお宅では、最後の一冊として、切り絵の蔵書印を貼って大切にしておられた、豆詩集「浦塩詩集」をおねだりして、頂いたりもした。

私は多喜三郎さんの詩が大好きである。多喜三郎さんの詩の奥底には、お念仏の信仰が秘められている。多喜三郎さんは、いつも、

「詩は私の宗教です。」

と、いっておられたが、私は多喜三郎さんのお念仏が、詩になっていると思っている。

「浦塩詩集」などは、あの苛酷なシベリヤの抑留生活の中で、祈りつづけられた菩薩の詩そのものであると思う。そんな詩集の、大切な最後の一冊を、とまどわれながら私に布施して下さい。申し訳けないことをしたと思うが、それだけにお守りのようにおまい、今なお大切にしている。詩碑に刻まれた「私は話したい」の詩も菩薩の心そのものだと思う。

ところで、菩薩の心には、四無量心というのがある。

慈無量、悲無量、喜無量、捨無量の四である。

慈とは、原語に、友という意味があるという。すべてのものを友とし、友情をもつことが慈であり、友情がかぎりなく広がることを慈無量という。「私は話したい」は、慈無量の詩である。

悲とは、他の苦しみ、悲しみを、自らの苦しみ、悲しみと感ずる心という。一切のものの悲しみを、同情共感の心である。これがどこまでも広がってゆくことを悲無量という。多喜三郎さんの人柄はそうだった。他の人の心配をわがことのように案ずる人だった。

喜とは、他の人の喜びや、幸せを、自らの喜び、幸せとする心である。随喜ともいう。多喜三郎さんは、他の人の幸せになることを心から喜んで下さる人だった。私はその切実な事実を知っている。それだけに、多喜三郎さんの人柄に魅せられたのだった。除幕式の日、参会者一同、自分のことのように喜び得たのも、多喜三郎さんの喜無量の心のゆえではなかったろうか。

捨とは、執われを捨て去ることである。自己中心の考えをはなれ、ものごとにこだわることのない人は、自己平等の世界に生きることができる。つまり布施の心であ

る。布施とは、持てるものが、持たざるものに恵みを与えるというような行為ではない。それは上下の区別、自他の隔たりをこえて、平等の立場に立ち、自然になされて、なおかつ一切の報いを求めない、また、如何なる期待もたない行為なのである。施しつづけるところに捨無量の心がある。多喜三郎さんは、いろいろなものを、いろいろな人にプレゼントして喜んでくれる人だった。

昭和四十一年四月一日、こんなに親切で、思いやりの心の深い、多喜三郎さんは、痛ましくも、交通事故によってこの世を去ってしまった。悲しみの知らせは各地にとんだ。報をうけた全国各地の知人、同人ひとしく、驚きと、悲しみと、憤りで鳴咽した。私は九州に修学旅行を引率中だったが、その夜、家に連絡して事を知らされた。茫然自失声も出なかった。そして次の瞬間、こみ上げる悲しみと、涙をおさえることが出来なかった。電話をおき、合掌瞑目すると、不思議にも、あの人なつかしい笑顔と、澄みきった眼差しと、飄々としてさわやかな多喜三郎さんが眼前に浮ぶのだった。余りにも痛ましい最後にも拘らず、実感されたものは、安らぎの世界だ

った。人を愛し、動物、草木、自然におもいを通よわせられた多喜三郎さんだったから、すべてを許し、安らかな心で、お浄土に帰ってゆかれたにちがいない……。菩薩の心をもっておられた多喜三郎さんだから……。私は、そう確信して合掌、回向した。

堀口大学先生は、次の追悼詩を、多喜三郎さんの霊前に捧げられた。

詩人井上多喜三郎のみたまに捧ぐる挽歌

五首

高らかに詩の堅琴かきならし

近江の多喜三いま天かける

友ら見よ多喜三を乗せて天馬ゆく

老蘇の空の春の光に

心より笑う目もと口もと

つひに見がたき境に入るか

詩ころ一図に生きし君なりき

布施を愛して心に富みて

君に見る近江聖人がおん心

近江が生みし詩聖人これ

あれからも満十三年がすぎ去った。詩碑が建てられてから満十七年である。多喜三郎さんに出遇った喜びは、年月の経るほどに深くなる。それとは逆に、お別れした悲しみは、しみじみと新たなのである。

それにつけても、私たちの心は、何といつまでも未熟なのだろうか。四無量心などはおろか、嫉み心を抱き、驕慢の心うごめき、自己に執する心ぬぐいようもなく、狭量な心で互いに慙しみあい、害ねあつて、あくせくと日々を送っている。それが人間のいつわらざる性であり、人類の悲しみなのである。

仏のみ教えは、観念的なものでは決してない。人間の生活の上に、具体的にあらわれ、そして万人が救われる道なのである。それが菩薩のような心の上であれ、凡夫のみにくい性の上であれ、同じである。

井上多喜三郎さんという仏道詩人の上に具現した菩薩の心。私という凡夫の、如何ともしがたい性、それがめぐりあい、触れあった喜び。私はそれを大切にしたいと思う。



インド
ネパール

旅 塵 集

きの
した
りゅう
いち
木下隆一

(隨筆家)

仏跡の調査印度へ旅始

春塵やデリーを出でて小半刻
煉瓦焼く煙ひとすじ霞みけり
春の風サリーの裾に纏ひつく
野に立てば目路の限りは霞みけり
かげろふや残る煉瓦の城壁に

春の空秃鷹群れて輪を描く
史書に残る不落の城や風光る
春光にまばゆきタジ・マハールかな
タジ・マハール池の面に風光る

タジ・マハールあくまで春の空青し
贅尽す廟に春の日満ち溢れ
塔の影写しヤムナの水温む
秃鷹の群の輪舞や風光る

瘤牛の白きは立てり草霞む
ひるがえ
翻るサリーの裾や遠霞
春堤を駱駝の列が行きにけり

見渡せばデカン高原霞みけり
春塵の市抜けて行くバスに居り
春昼や市に裸足の人群れて



—インドの田園風景—

朽ち果てし城址に立てば風光る
春かなし指に崩るる城の壁

デカン燃ゆ春日は山に入りにしも
穂麦燃ゆデカンの明かき落日に
いま春日落ちぬと友へ書く葉書
夕朧ブーゲンビリア風に揺れ
岩おぼろデカンの夜は寒けれど
細り行くデカンの月のおぼろかな
デカン更け月より明かし春の星
悠久のデカン朧にしづもれり
悠久のデカン高原おぼろ月

エローラ、アジャンタ石窟にて
春日のとどかぬ窟や像の微笑
春愁や半跏思惟像年古りて
窟院の石像春を噛みて立つ
窟うらら壁の女人等豊かなり
船霞むアラビア海の汚れかな

春日没るアラビア海へ華やかに

クシナガラ釈迦涅槃の地春曇り

春陰や横臥す黄金の涅槃像

春かなし葉をふるはせし沙羅双樹

春陰や沙羅の林を抜けて行く

水郷の趣きありて早苗植う

白き牛黒き山羊群れ春曇り

初虹やカピラ城址に我立てば

初虹やネパールの山踏まへ立つ

初虹の彼方に山がほの見える

焼米の化石を拾ふ春かなし

春暁や牛車は霧に紛れ行く

春暁や牛車轍の音残し

ベナレスや聖なる春の水濁る

沐浴の肌えに寒し春の水

茶毘に付す煙儚し暮の春

水滴々ガンガ対岸霞みけり

牛を追ふ子の杖長し風光る

繚乱のブーゲンビリアかざろへり

悠然と暹日の道を牛の群

土壁に牛糞乾く遅日かな

春日の残光淡しストゥバに

中空に印度の月はおぼろなり

我は印度娘は春寒のアメリカに

菩提樹に春風そよぐ日和かな

ブダガヤの大塔春の空へ聳つ

尼連禪河原春日目眩く

春昼のひととき荒ぶ砂嵐

春暑し眼下を過ぐる砂嵐

伝説は瀟過され美化され風薫る

青嵐に読経流るる靈鷲山

遺跡掘る人等かげろふ身に纏ひ

春が行くシタールに熱燃やせしも

爽涼の思ひもありぬカトマンズ

ネパールの大河蛇行し霞みけり

山巔に翳して春の雲流る



—タジ・マハール寺院—

両切りのピース欲りせり夜半の春
雲海をゆらりと春の日が昇る
ヒマラヤの雪峰に疾き春の雲
春暁や雲の上なりマナスルは
春寒し山は雲産み雲を吐く

尾の長きインコ翔びさる春の暮
カトマンズ桜と名づけ花と愛つ



—エローラ石窟院—

目の寺の目に魅入られてうらけし
目の寺に立てば春光限りなし
うらけし小猿の和毛吹く風も
夜半の春愁の権化を省みし
雲の間にヒマラヤ光るうららかな
神々の座の雪解水濁り濃し
ヒマラヤの雪解け水の迸る

■ 六時礼讃の「無常偈」に生きる ■

— 四 —

— 初夜無常偈 —

安居香山

(大正大学教授・文博)

○

六時の中、前回では「日没無常偈」を取りあげて、その生き方を、私なりに考えてみましたので、次に「初夜無常偈」について、善導大師のみ心をうかがい、私の生きる道を求めてみたいと思います。最初に前回と同様に、本文を掲げてみることにいたします。

煩惱深無底 煩惱深くして底無く

生死海無辺 生死の海辺り無し

度苦船未立 苦を度るの船未だ立たず

云何楽睡眠 云何ぞ楽しんで睡眠せん

勇猛勤精進 勇猛に勤めて精進して
摂心常在禅 心を摂して常に禅に在り
これも、読んで頂けば、大体の意味は分りますが、例によって大木惇夫氏の和訳を掲げてみますと、次のようになります。

煩惱深く底いなく

生死の海は涯もなし、

苦をわたる船まだ発たず、

など眠りをばむさぼるや。

励く勤めて いそしみて

心を西に定むべし。

さて私達は、前の「日没無常偈」によって、人生が風前の灯のように、無常であることを、厭というほど知らされました。又、善導大師のご指摘を受けるまでもなく、そのことは、よく承知しています。承知しながら、つい日常生活に追われているうちに、そうした事実を忘れて去っているのです。そして、「日没無常偈」によって、いくらか目をさまされました。うかうかとはしていられないことが、少しは分ってきたような気がいたします。

善導大師は、こうした反省に追い打ちをかけるように、「初夜無常偈」の中でも、再び警鐘を乱打されています。しかし、ここでは、人生の一大事である無常そのものをわれわれに知らしめたとして、次の問題にと、一歩進められています。即ちここでは、そうした無常な人生に生きておりながら、一向にその事実が目ざめず、墮眠をむさぼっている私達に、一大鉄槌を打ち下されているのです。

私達には、多くの迷いがあります。この迷いは、その根源となる煩惱といわれるものがあるからに外なりません。仏教では、こうした心の迷いの根源ともいえる煩惱の根本的なものとして、貪・瞋・痴・慢・疑・見の六つ

をあげています。有り余るほどあっても、まだ満足しようとしないうさばり(貪)の心、いつもいらいと腹を立てている心、愚痴っぽくあきらめない心・慢心・疑心そして、おれがおれがという我見など、まことに仏の説かれる通りです。そして、これらがいろいろとからみあって、人間には一〇八の煩惱があるともいいます。

除夜の鐘の数は一〇八ですが、これも、一たたきごとに、この煩惱を追い払い、新しい年にそなえるものだと教えられたことがあります。こうした煩惱は、幾つになっても消えません。子供の頃は、まだ単純で、ほほえましい欲心ですが、年をとると共に、いろいろな迷い心ができてなかなか消えません。六十にも近づこうという年になれば、もう少し悟り切った気持ちになれそうなのですが、一向に消えていかないとは、何と悲しい凡夫でしょうか。われながら、口惜しい限りです。

善導大師は、こうした人間の赤裸々な姿を、

煩惱深無底 生死海無辺

というわずか十字で、心憎いまでにご指摘されました。まさにそれは、大海のごとくはてしなく深く広い心の迷いの世界であります。一体、この中に沈淪して、どうす

ればよいのでしょうか。

必然そこでは、自分の頼りない力では、どうすることもできません。助けの船を求める以外には、ありません。しかもその船は、一寸した波に押し流されたり、ひっくり返るような船では、とてもこの罪重い私達が、救われるものではありません。ところが、私達には、まだその小さな船の用意さえできていないのが、実情であります。一体、これはどうなることでしょうか。

こんなことを書いている時、私はいまベトナムを逃れて、船で避難地を求めて漂流している船のことを、思いだしました。故国に住むことに満足できず、小さな船に乗り切れぬ程の人が乗り、あてもなく漂っている状況は、地獄絵そのままであります。行く先もなく、受け入れてくれる国もないままに漂よい、時には海にのまれ、時に飢え死にする姿は、又、私達の姿そのもののように思えてなりません。この人達には、まだ船があります。いつ沈没するか分らぬながら、まだ、すがるべき船があります。しかし、最早や、死の海にさ迷っているのと、同じであります。

私達は、ひと事のように、この事実を、毎日の新聞で

見ていますが、それは、実は毎日の私達の姿に外なりません。船もなく、方向も定めず、ただ荒れるままに流れ、そして沈んでいくのが、偽りのない私達の姿なのであります。しかも、まだその事実さえも、自覚してしないことが多いのであります。

云何楽睡眠 など眠りをばむさぼるや

ここで善導大師は、再び大音声に叫んでおられるのであります。

「早く目をさませ。そして、四囲をみてみなさい」

「日没無常偈」でもそうでしたが、大師はしばしば、われわれに話しかけられます。いや、話しかけるといふような、生易しいことではありません。睡眠をむさぼっているわれわれには、やさしい声では、とても目を覚すことはできません。小さな目覚し時計の音では、春眼を覚すことができません。金だらいを、捧ででもぶったたくような音が、必要です。その叫びが、「云何楽睡眠」という一句では、ないでしょうか。

私など、自制心の弱い男は、まあまあということ、いつも欲心に駆られて、深みに沈んでいく事が多くあります。そして、後悔することもあります。すでに後の祭

りということです。後悔するようになっただけ、少しは進歩しているのでしょうが、後悔する前に、欲心を自制するように、何とか努力したいものです。

ところで、善導大師は、前の「日没無常偈」でもそうであったように、私達に現実の恐ろしい事実を示すだけでは満足していません。それだけでは、とても凡夫は自覚もせず、駄目になると思っておられたのでしょうか。更に激しく強く戒められておるのが、最後の二句であります。

勇猛勤精進 摂心常在禅

なんと強いお言葉でありましょうか。「勇猛果敢につとめて精進努力せよ」といわれるのであります。そして、煩惱に迷う心を自からたずなをしめ、心静かに安住せよと戒められるのであります。大木氏は、このところを「心を西に定むべし」と訳されていますが、西方浄土を願う善導大師のみ心からすれば、そうした解釈となりますでしょう。

禅とは、仏教ではよく禅定として用いられるように、俗世間の迷いの心を離れて、寂静の境に入ることを行います。善導大師のみ心からすれば、煩惱の迷いにゆれ

動いている心をしずめ、静かに念仏生活をすることを、おすすめているのであります。

「初夜無常偈」に類似した当時の「無常偈」が、『座禅三昧経』の中に見られますが、しかし最後の二句はありません。したがって、これは善導大師ご自身のご発想であり、お言葉であります。しかもそのお言葉は、前にも述べましたように、極めて強烈ないい方であります。

私は、ひそかに善導大師は、極めて意志の強烈な、性格的にも強い方でなかったかと拝察しています。例えばここにあるような、「勇猛勤精進」という強いお言葉で語りかけてこられるということは、そうした強い性格をあらわしているように思われるのであります。

この五月下旬、私は「第二次日中友好浄土宗の翼」の人びとと共に、中国を訪れ、玄中寺に参詣し、西安市を訪れ、そして終南山が見える香積寺に参詣してきました。西安（昔の長安）の都から相当の距離にあります。ここから都に掛けて、こうして説法しておられたのだと思うと、感激の淵にしたると共に、大師の強い精神力を考えざるを得ませんでした。

■善導大師の生涯とその教え■

— 八 —

◇ ◇ 浄土変相 ◇ ◇

○

善導大師の長安の都における教化の力は、ただ単に一般大衆だけではなくて、当時の仏教学界をはじめ、思想界に多大の影響を及ぼしたのであります。仏教各派のなかでも、お念仏によって浄土に往生するという主張に対して異った見解を示すものもありました。たとえば、その代表的なものは摂論学派であります。摂論学派は、インドの無著菩薩の『撰大乘論』に説かれた思想に共鳴する学徒に名づけられたものですが、中国の隋から唐のはじめころに非常に栄えた学派であります。その主張は、「阿弥陀仏の浄土は、報身報土であるから、決して我々

のような凡夫の生まれることのできる世界ではない。『観経』に、凡夫が十念すれば浄土に往生できるように説いているのは別の意味であって、お念仏が直ちに往生の正因とはならないのである」というのであります。

これに対して善導大師は、『観経』に説かれているお念仏の信仰は、凡夫が報土に生まれることができることをはっきり示されているもので、とくに罪惡の凡夫こそが正機であることを明確にされたのであります。しかも救済の対象となっている凡夫のもっとも実践しやすい易行であり、最勝の法門であるとして、摂論学派を説服されていきます。

そのほか『念仏鏡』には、つぎのような記事がみえて

います。

「善導阿闍梨、西京寺内にあり、金剛法師と念仏の勝劣を校量し、高座にのぼりてついに発言していわく、誰か諸經のなかの世尊の説、念仏の一法淨土に生ずることを得」

ここにでている金剛法師がどういう人であったかは不明ですが、念仏の勝劣について論じ合いながら、念仏によって淨土に生まれることを、諄々と説かれるとともに、現実眼のあたりに淨土の莊嚴圖を示されて納得させたのであります。

大師の長安における教化は、「春光の熙々としてあまねく草木を饒益することく」といわれますように、あらゆる階層の人々に念仏の法門が弘まっていたのであります。そのことを『往生伝』には、

「京師に至りて四部の弟子を撃発す。貴と賤とを問うことなし。かの屠沽の輩もまた撃悟す」

とありますが、出家の比丘や比丘尼、一般の仏教信者の人々は、さらに、前にものべましたように、肉商の屠兒宝蔵が念仏行者になるなど、おしなべて念仏による教化力の偉大さが伝えられています。



おもえば、善導大師の前には道綽禪師、曇鸞大師とさかのぼることができ、後には懷感、懷憚などのお弟子たちが継いで、淨土のみ教えは、唐代の天下を風靡したのであります。なんといっても、善導大師の熱烈な教化伝道の力は光彩をはなっていたようであります。

その大師のユニークな教化方法として、淨土教藝術をもちい、とくに当麻曼陀羅のような極楽淨土の有様を画くことにより、視聴覚にうったえて一般大衆を導かれたのであります。大師ご自身は幼少のときから、西方淨土の絵をご覧になって、淨土教に心を傾けられたようであります。絵画はあらゆる人々に感動をあたえるものですが、とくに宗教絵画が伝道に大いなる効果があることは当然のことといえましょう。

善導大師が西方淨土の変相を画かれたことは、たとえ

ば『瑞応剛伝』には、「善導みずから浄土変相三百鋪を画く」とありますが、その功德についてもつぎのようにべられています。

「もし人あり、観経などによって浄土莊嚴の変相を画造し、日夜に宝池を觀想せば、現生念々に八十億劫生死の罪を除滅す……」

經によりて、変を画き、宝樹宝池宝樓の莊嚴を觀察せば、現生に無量阿僧祇劫の生死の罪を除滅す」

と、大師は『觀念法門』には説かれていますが、浄土変相を画き、それを拝むことによって、人々をして浄土往生の思想を育て鼓吹するとともに、それによって、罪が消滅して、心が浄化されることが示されていることは、まことに、日常生活の指針を明かされたものといえましよう。

そもそも、西方浄土変相とは、一般には、浄土曼荼羅とか、阿弥陀曼陀羅といわれるもので、阿弥陀如来の浄土、即ち極樂浄土の世界の莊嚴を圖にあらわしたものであります。希い求めてやまない浄土の世界を絵にし、お

經に説かれている「願わくは、もろもろの衆生とともに、安樂國に往生せん」という趣意を一目瞭然にだれにもわかりやすく表現し、生死輪廻の罪障を滅するため具体的に示されているのが、この浄土変相であります。ちなみに、わが國に古くより伝わっているところの当麻曼荼羅は、善導大師の『觀經疏』の説示と一致していることで有名であります。

善導大師がお念仏の道をすすめられた当時は、異民族が侵入した時代であり、したがって外国の諸宗教が盛んにはびこり、一方においては、仏教の諸宗派が独立して、華嚴、天台、法相、律などの各学派が理論的に研究するなど、仏教教理面では栄えましたが、他方では一般大衆と遊離する結果を生ずることとなったのであります。このような時代のなかで三階教の勃興によって、金融機関無尽蔵の隆盛など、今日のいわゆる社会事業の活動はなされましたが、しかし危険視されて衰滅状態においこまれるようになってしまいました。

そのような状況のとき、善導大師の説かれた念仏の道は、大い盛んになり、滅後にいたりますます栄えたことは、大師の人格の高潔さと、深い真理の教えが平易に説

かれたということが考えられますが、さらに加えて、教化伝道の方法が、たえず時代の風潮にアツピールしたといふことがいえましよう。いままで仏教についての一般大衆の理解がとぼしかったものが、大師の浄土変相図によって、きわめて親しみやすくなったものでありましよう。この変相図は、まさしく理解しやすい仏教教理の説明図であつたわけです。

唐代には、寺院の壁画として、地獄や極楽の変相がたくさん画かれたようであります。善導大師はこれを利用して、画幅としてつぐられ、適宜な場所にかけて、人々に極楽のおすがたを示しながら、宗教心をおこさせたのであります。

また一方では、地獄変を画いて業報の恐しさを教え、他方では、浄土変を示して、阿弥陀の浄土の世界に生まれる喜びを味わしめたのであります。この絵画の出現は、やがて浄土教美術を生み出すことになったのであります。



善導大師は、ご自身の深く信じたものを、人々に伝え

て信仰を深めるために大変努力をされたわけですが、あるとき、光明寺で説法されているとき、「今、仏名を念ずるに、定んで浄土に生るるや否や」という質問に対して、大師は「定んで生まる」とはっきりと答えられたといふのです。

「その人礼拝しおわって、口に南無阿弥陀仏を誦し、声々相つぎ光明寺の門を出でて柳樹の表に上り、合掌西に望みさかしまに身を投じて下り、地に至り遂に死す、事、台省に聞ゆ」

と『続高僧伝』には説かれています。信者が感激のあまり、身を投じて、いわゆる捨身往生したといふのであります。このことについて、『往生伝』とか『新修伝』には、大師自らの捨身となつていますが、これは古伝を誤り伝えられたもので、むしろ、善導大師の浄土往生の偉大な教えが、誇張して伝えられたのではないでしようか。

(宮林昭彦)



〈民話シリーズ〉

竜神谷の供養塔

谷川たにかわのぶ也や

(郷土史家)

縁を結んで十年、貧しいながらも助け合い、毎日毎日

をコツコツと生きてきた英助夫婦にとって、一つだけものの足りないことがありました。それは、子宝に恵れないことでした。そして、他人さまの子供が無邪気に遊ぶ様子を見るにつけ、その思いは募る一方だったのです。

「どうしてワシらには子供が出きんのかのう、神も仏もありませんよ、あき」

「本当だね、生きる甲斐がありませんよねえ」

一日の仕事を終え、二人だけのもの静かな夕餉どき、こんな愚痴に近い会話が、ここ何年か続いていました。そして近頃では、半ばあきらめに似た、ため息まじりのものとなってきておりました。

「もうこのことは口にせんことにしよう、気がめいるだ

けじゃ、なあ、あき」

ある日の晩、英助は、人一倍気弱なあきあきの身を案じ、さり気なくいい伝えました。

「ありがとう、そういつてもらうと助かるわ」

二人ともあきらめてはいないものの、その後、子供の話はまったく出ませんでした。そして、そのやるせない氣持を仕事にぶつけ、もくもくと働いたのです。

それから三年が経りました。英助夫婦は、傍もうらやむほど富裕になっておりました。

しかし、好事魔多しの譬え、働らけど働らけど生甲斐なき英助にとって、そんな生活ぶりが息苦しいものとなってきたのです。やがて、気をまぎらすため、それまでほとんど口にしたことのない酒を飲むようになったので

す。はじめのうちは仕事の終った夕餉どきに口にし、酔いつぶれて寝込むという状態が続きました。しかし、いつしか酒に溺れていつてしまったのです。

「お前さん、少しは身体のことを考えて下さいな。そんなに飲んだら毒ですよ、ほどほどにして下さいよ。だらしない人だね、まったく」

「うるせい、自分の稼ぎで飲んでるんだ、つべこべいわれる筋合いはねーよ」

あきの心配をよそに、英助の酒量は増える一方、ついには朝酒を飲むようになり、仕事どころではなくなっていたのです。貯えは、みるみるうちに減り、無一文に近いところまできてしまっておりまし。

そんな、その日暮しにも事欠く状態の英助夫婦に、大変なことが起りました。

酒づかりの英助が、日に日に痩せていくのに引換え、あきは腹部を中心に太り出したのです。

「ろくなものを食べてないのに太るなんて、もう中年太りかね、いやね」

あきは独り言をいいつつ、あることに気づきました。

「まさか！」

そういえば、ここ六カ月ほど、月のものがなかったのです。あきは、恐る恐る腹に手を当てました。微かに動いておりました。自分の意志に反するものがです。

「まちがいない、子供ができたんだわ」

あきは小躍りし、酔いつぶれて寝込んでいた英助をたたき起しました。

「お前さん、できたんですよ、ほら、できたんですよ」

「うるせえな、なにができたんだ」

「子供ですよ、動いているんですよ」

「なんだと、どこにいる、どこにもいないじゃないか」

「ここですよ、私のおなかの中にですよ」

「な、なんだと、ガキができた、ウソじゃあるまいな」

英助は、震える手を押えつつ、あきのおなかに手を当てました。

「なんということだ、このワシに子供ができるなんて、どうしたらいいんだ、がんばらねばなるまいぞ」

翌日から、怠けきった身体に鞭打ち、英助は、人が変わったようにしやにむに働きました。無理からぬことです。生き甲斐ができたからです。

それから三カ月後、あきは珠のような男児を産みおと

しました。英助の喜びは一樣ではありませんでした。それもそのはず、英助が三十五歳、あきが三十歳にしての子宝だったからです。

「幸助」と名づけられました。幸せに育ってほしい、という英助の願ひからです。

幸助は、英助夫婦の寵愛を一身に受け、すくすくと順調に育っていききました。

さて、話はかわります。

山間の額ほどの場所を利用して建てられた住居が点々と散在する、ここ中島の郷。その中心部を中島川が、深い峡谷をぬって流れておりました。狩猟を生業とし、山の幸を採っては食たべい扶たすけとしていた村人にとって、中島川は、唯一の水源であり、また、その河原は憩いの場、特に子供たちにとっては、たのしい水遊びの場となっておりました。

英助もあきも、ともにこの河原で遊び、育ったなかでした。しかし、毎年、二、三人の子供たちが濁流に呑まれ、この世を去っていくのを見てきました。

そうなのです。ひとたび降雨となると、濁流は深く切

り込んだ谷間から、その下に広がる河原へ、一気に流れ込み、すべてを呑み込んでしまうのです。それは、ちょうど竜が襲ってくるかのようにでしたので、村人はその谷を「竜神谷」と呼び、大変恐れておりました。

村人たちは、雨が降り出すと、取るものもとあえず河原で遊ぶ子供たちを高台へ避難させるのですが、岩かげで夢中に遊ぶ子供を、時として見のがし、尊い犠牲者を出すことがありました。

けれども、村人たちが細心の注意をはらい、河原に一人もいないと確認したあとでも、犠牲者を出すことがありました。そんな時、村人は、神かくしに遇い、竜に捧げられたのだ、といい合い、半ばあきらめ、ただただそれ以上犠牲者が出ないことを祈るのみだったのです。

さて、幸助も親の目を離れ、河原で遊ぶようになりました。英助夫婦の心配は一樣ではありません。しかし、ほかに遊ぶ場所を持たない山間ゆえ、十分にいい聞かせて、なくなく送り出しておりました。

幸助が七歳を迎えた春の、ある日のことです。その日は朝から快晴で、英助は銃を片手に、冬眠からさめた動物たちを追って、山へ出かけて行きました。しかし、鳴



き声が聞えるものの、その姿は見えず、昼を過ぎても一匹も射止めることができませんでした。

「おかしいな、こんなはずないのじゃが」

独り言をいいながら、英助は疲れた身体を切り株に置き、考え込んでしまいました。

どれほど経たでしょうか。時季はずれの雷鳴で我に帰りました。みるみるうちに豪雨となったのです。

「しまった、幸助は大丈夫だろうか」

英助は、銃を投げ棄て、河原を目指し一目散。転んでは起き、起きては転んで、全身傷だらけになりながら、ようやくたどりつきました。

その時、河原はすでに濁流に吞れておりました。それではと、不安のなかに踵を返し、わが家に戻った英助を迎えたのは、泣き狂ったあきだけでした。

「どうした幸助は、どこにいるんだ」

「いないのよ、戻らないのよ、消えちゃったのよ、どうしましよう、あんた……」

「おい、泣いてちゃわからん、もう一度河原へ行こう」
幸助は一縷の望みをかけ、あきの手を引き河原に向いました。しかし、河原は、先程にも増して轟々と狂流す

となので、上人からの御返事をそらに詣じてとどこおりなく申し入れた。浄勝房らは、年来学んできたことなで、法蔵比丘のむかしから、阿弥陀仏になられたことを述べ、凡夫が極楽に往生できる旨をはっきりと申し述べた。この結果、為守らの申し立ては、何らとがめ立てする理由はないので、今まで通りつとめ行つてよろしいということになった。以上で一件落着いたのである。

関東の津戸事件はこれでおさまりがついたが、京都における念仏弾圧の嵐はますますひどくなり、ついにこの津戸事件の翌年建永二年（二〇七・十二月二十五日改元して承元元年）、二月二十八日、念仏は停止され、上人は藤井元彦と改名され土佐に配流されることとなった。そして三月十六日、上人は鳥羽草津から乗船し配所へ向つた。恐らくこの報せはいち早く為守のところへも伝わつたものと思われるが、なぜか為守は七月十四日に手紙を認めている。為守にしては遅い気がするのであるが、何かの事情があつたのであろう。

上人は武蔵から讃岐へ送られてきた為守の書状に対し、次のような返事を書き送っている。

七月十四日の御消息、八月二十一日に見候ぬ。はる

かのさかひにかやうに仰られて候御ころさし、申つくすへからす候

武州から讃岐への手紙は三十九日間を要したことが知られる。

まことにしかるへき事にて、かやうに候。とかく申はかりなく候。但今生の事はこれにつけても、われも人もおもひしるへき事に候。いとひてもいとはむと思食へく候。けふあすともしり候はぬ身に、かかるめを見候。心うき事にて候へとも、さればこそ穢土のならひにては候へ。たたとくとも往生をせはやくこそ思候へ。たれもこれを遺恨の事などはゆめにも思食へからす候。しかるへき身の宿報と申、又穢惡充滿のさかひ、これにはしめぬ事にて候へは、なに事につけても、たたいそきいそき往生をしてむと思へきことに候
あなかしこあなかしこ

八月二十四日

源空判

日付と源空判は『九卷伝』を借用し、他は『四十八卷伝』から引用させていただいたが、このとき、上人はすでに七十五歳で、文字通り「けふあすともしり候はぬ身」であつた。それが「かかるめを見候」は、まことに「心う

き事」であるが、それが「穢土のならひ」であり、誰もこれを遺恨に思つてはならない、「宿報」なのである、とさとされている。

私は浄土教とは宿報を知る教えであると思つてゐる。

宿報とは何か運命論みたいに思われそうだが、運命論は責任を感じない。責任を感じないから己れをふりかえることはない。宿報は己れをかえりみ、己れの至らなさを知るが故に、大いなるいのちに随順する信が生まれる。人間を信ずるあまり、人間の力によって何事も解決しつくせると信ずる現代に対し、浄土教は真向対決する結果となるが、それなればこそ浄土教が現代に生きる意義を見いだす。

法然上人から為守に宛てた消息は、以上九通をもつて終つてゐる。私見をまじえた不確なものであるが、一応これを古い順に並べてみたい。

1 建久六年（一一九五）か、九月十八日付、二位禪尼

宛と同文の消息

2 建久七年ごろか、

戒袈裟等乞はれける時の消息

3 念珠を所望しける時の消息

4 或時の消息

5 真影を所望しける時の消息

6 建久八年か、九月二十八日付、専修念仏者三十余人

の消息

7 建久九年か、四月二十六日、上人ご病氣の消息

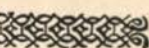
8 元久二年（一二〇五）十月十八日付、津戸事件の消息

9 承元元年（一二〇七）八月二十四日付、上人遠流の際の消息

ということになる。7、8、9の消息の年は間違いないところであるが、1から6まではまことにおぼつかないものである。

法然上人は承元元年二月配流されたが、その年の十二月、勅免の宣旨を受け、摂津の勝尾寺に帰着された。ここに留ること四年、建暦元年十一月帰洛を許され、大谷旧房に帰られたが、それからわずか二カ月して、翌建暦二年正月二十五日、光明遍照の文を誦し、正念入寂された。寿八十歳であった。為守がこの報せをどのような氣持で聞いたかは、どこにも記録はない。為守はこの年、五十歳であつたはずである。

浄土句集



一田牛畝選



東京 鳥居 千代
好きな本好きな時読む春炬燵

東京 猪瀬 幸子
湖昏るゝ水尾なが／＼と残り鴨

福岡 国友 星畝
柏餅酒やめてより好々爺

咲いたとの花便りは微笑しいものである。

東京 新井 新生
嘲りの聞えて雨のあがりけり

評 酒吞めば笑い上戸で、愛嬌よくなる人

東京 栗原やえ子
無住寺の観音像に花吹雪

東京 真野よし子
百千鳥騒ぎて朝の始まりぬ

評 住職はいないが、この寺には観音様が

東京 栗原とも子
坂下の町より灯る春の宵

祀られ、その境内には桜の大樹があつて、寺は古いらしく、観音様は由緒あるらしい。

福岡 荒牧 還愚

家中の人からも好かれ、そして家の中もまた、明るくなり、長生きを願われるようになる。

京都 安藤 寛
魚跳ねて精進湖の水ぬるみをり

地藏堂にて一家族花の宴

東京 阪入 等達

とも角も病癒えしと花便り

大分 丹羽 難中
調停のことは語らず花の客

愛媛 伊藤 新三
青葉影法然上人産湯井戸

評 寒い冬も過ぎて暖かくなった。皆に心配されていた病いも癒えた報告に、桜も

福岡 高良 慈風
父の日に朝鮮土産の人蔘を

福岡 上滝津弥音

手折り来し夏花麗のお地蔵へ

東京 小笠原香祥

童行つ野面の薺咲きそよぐ

滋賀 松尾 郁芳

菖蒲活けお香を焚きて客を待つ

福岡 原 敬二郎

山門も大石段も花曇

東京 末常てる子

春嵐セツトの髪を気にしつゝ

東京 田中 秀代

摘みし芹ゆるき流れに洗いけり

群馬 島津 か寿

四七日の夫に捧げる白菖蒲

山口 三井 寛静

詠唱の声満堂の春供養

花冷や赤房の数珠いとけなく

東京 鈴木 葉子

山形 松田 允子

山門をくぐり一面花の屑

東京 吉田ゆきゑ

海棠の縁に写経の机かな

雲晴れて止みたる風や山笑う

東京 阪入志津枝

山形 松田 光誉

遠桜閉め忘れし寺の窓

東京 細田 初枝

一面の花菜明りの安房の里

東京 吉原登起子

窓近く鶯啼ける山の朝

山梨 青山富貴江

鶺鴒の尾を振っていし雨あがる

長野 原 幽遊

燕の庫裡一巡し去りにけり

福岡 永江 隆説

芍薬の芽吹きてしきり父恋し

福岡 高良 幸代

書に倦みて憩ふひととき花菖蒲

山口 上野 明達

新緑の映ゆる参道連れたちて

福岡 植藤みきを

声色も歌舞伎もどきに御忌の僧

三重 森 静枝

落ち椿まだ美しき藪の中

埼玉 佐久間愛子

人影もなき一刻や初音きく

江戸情緒残る鬼灯市に来て

一田 牛畝

陀像と、丈余の涅槃図が西方寺に施入されている。恐らくは本文中の伊藤左馬の因縁によってその後裔が寄進したものであらう。また、名古屋の豪商松坂屋の出自もこの伊藤氏と思われる、などと聞けば、にわかには西方寺縁起も現実感を帯びて迫ってくるのである。

読み下し文

河州石川郡富田林天正山西方寺神宮院の縁ならびに

序

古えの者の言うには、流れを酌めばその源を尋ね、香を開けばその根を求めると、然らばその流れに鹽ながら未だその香氣を聞かずとあるならば、豈源委とその本根を心うことの無きを得よう乎。

属者、勤修の余力に就つて竊かに住山の来由を記そうと欲い以て旧記を尋ねたが或いは蠹れ、或いは脱くなつてしまつてゐる(焉)。惜しむべく恨むべきことである。よつてこれを古老について正し、補い、終に一巻に綴つた。遂に備えようとするものである云(爾)。

昔時寂蓮社光普上人長山和尚と云う人が行を知め稍く道聞けて徳弥高く性艱辛に湛えて諸国を経歴つていた。時に年四十有余であつたが紀州高野山に詣でて帰る期偶当処に宿をとつた。粵絶境の勝地に星霜年旧りた寺と又その畔に社が在つた(焉)。

老耆の伝説では、法処に昔斑鳩宮の太子の時従一宇があり寺号を浄土寺といったが中二口は地震のために破れ陵夷退廃してしまつたと。また当社の社はこの地の鎮守であつて神武、仲哀、応神などの三十八皇神である。

光普は頻りに断たぬものを繼んどの考えを發して、村民と相料り乃ち小庵を社の前、蓮池の畔に結び、偏に西方に向い昼夜を分かたず称名念仏した。所謂此界で一人が仏の名を念ずれば西方に便ち一つの蓮が生ずるという積意を擬としたのである(耳)。

念仏の功を積んでゐると後蓮池が夜々光を放つてきた。光普は深く心に於いて信ずるところがあつたが敢えて人に語ることとはしなかつた。或る夜、夢に殊勝な仏像が来れ告げて曰るには、吾は此の池に在つて汝を待つ月の滝し、汝何迎えざるやと。夢から

覚め、随喜して教えに任い、池中を探したところ果して
仏像を得た。これを拜すると聖徳太子の正しくお作り
になった阿弥陀仏の尊像長さ二尺一寸であった。光
譽は感喜交に動り、涙が流れ裳も沾れた。便ち龍の
中に移し、供を給つて誠恭勤行をなし、孜子として
自他に回向した。

さて粵に伊藤左馬と云う人があり、太閤秀吉公の吏と
爲つて当処を執權めていた。一日、夙より狩をし
たが煙霧が霧々人馬も進むのか難しかった。仍
ち此の庵室に於いて晴れるのを待つこととした。そこ
で仏像を覽て、是は誰の像乎と問ねた。光譽は備に
前縁井に靈験の多きを告ぐると左馬は點頭、便ち禽
の多きを祈つた。光譽は害すことは利無く、しか
も勝ならずと嘆き心を制めて偏に慈を念つた。
左馬は已狩をしたが、竟日一つの禽をも得な
い。そこで大いに叱り、僕に告げて謂うには、是は禰
の仏僧の所爲に疑と(耳)。汝往きて仏を撞ち僧を
罵れと。僕は行きて果にした(爾)。其の夜左馬は
偏身が痛苦甚しかった(焉)。驚いて使を馳せ、
追悔んでいた。使者は途中で光譽に逢い、掛して曰

ねるに師は奚の乎と。光譽の曰うには吾は往來に
助力を乞ひ、摧破た仏像を修う爲に淀に赴こうと
するのだと。使者は伏して和睦を乞ひ、道に難つたの
で左馬の追悔志を光譽は諾ることとした。する
と左馬の悩みは忽癒えた。慚愧懺悔で仏像を再
び興す。復光譽の建立の志を資けたので終に此に一
字が營成つた。号を改め西方寺と曰んだが時に年は天
正十五年であつたことから仍ち天正山と号えることと
した。復以前の旧社が便ち鎮守となつていたので院号
を神宮院と名づけ、その由を後すこととした(焉)。
終淀に往き復一字を建てて名づけて長円寺と曰
び、滞留月在かつたが復先の仏像を夢たのであ
る。告げて曰るには、汝何速かに河州に還り吾を
守護せざるやと。覺て後愕然、不日店たのであ
る。道俗の帰依すること稻麻竹葦がごとくであつ
た。元和九年癸亥八月二十一日遽かに寂た。とき
に寿八十有八であつた。

追加

云え聞くところでは、遂片桐市正が当所を檢地し

た時境内が稍減じて蓮池が田と作つたと、又鎮守の三十八神は親房卿の諸社事に記されているが今は官府に在るの故をもつて披閱することは不能と。

又此の三十八神は金剛山鎮守の宮の大社であり、今惟毛人谷村当社の氏子が毎歳九月四日に祭礼を執り行なうは是其の遺事である(耳)。按うに北畠親房卿は後醍醐天皇の時の有職の達人であり諸社事の中の三十八神の名を略記している(焉)。謂うところの芳野山中の神三十八社を惣合して三十八神と為たのである。其の中でも神武天皇が最も尊く頂いものである(也)。

時に維れ元禄九年龍集丙子四月九日

天正山西方寺神宮院十六世

広蓮社宣誓生鉄玄澄 誌す

解説

「西方寺縁起ならびに序」は、現在二通りの筆写本として西方寺に保存されている。

一本は明治初年——文中の記録から明治六年六月以後であることは確か——に堺県庁に提出されたい寺院

由来書の控として作成されたものであり、今一本は使用目的も記録者も不明ながら、紙質・字体などから推して、恐らく明治初年から中期にかけて作成されたと思われるものである。

前者(以下稗元本という)は、当時当山の住職であった稗元達誓師あるいは同師の意を体した何人かの手によって書写されたものと見え、末尾に、住職権少講義稗元達誓と記名されている。「縁起」部分は提出書類の一部となっており、それ以外に当時の西方寺資財帳が併記されている。

察するに、明治政府の機関として新しく設けられた堺県に当山の縁起を報告するとともに、その認証を求めたものであろう。稗元住職はその職責上、何らかの資料によりその報告書を作成したのであろう。稗元本はその字体がきわめて几帳面であって一点一画を忽せにしない運筆である。恐らくは写経の訓練を積んだ人の手になったものであろう。いずれにせよ、記録者の資質と教養とを十分に窺わせる体のものである。

他方、記録者不明の写本(以下無名本という)は、稗元本に比べ運筆も自由であり、やや粗放である。何らかの必

要によって写本されたのか、あるいは古文書に対する単なる興味から写されたものか、今日では知るすべもない。両写本は昭和三十七年十二月、水郡庸皓氏の配慮によつて一巻に装釘され、良好な状態で保存されている。ただし両写本の底本となったものの所在は現在判っていない。

さて、穩元・無名の両本を比較照合すると、次の諸点に気づく。

一、穩元本は、無名本に見られる「追加」の部分を除きその内容はおおむね無名本と一致する。ただ両本ともに写本の際の不注意によると思われる誤字・脱漏が見られしかもそれらの箇所は両本それぞれ別個である。

ちなみに両本を通じて誤字・誤用とせざるを得ぬ箇所は、穩元本で七カ所、無名所で六カ所である。このうちの五カ所は両本に共通しているので、恐らくは原本の誤用を忠実に転写したものである。また、両本で字句の相違する箇所は九カ所、このうち穩元本の加筆によると思われるものは三の項で述べる二カ所である。また、一本ではその記録がなく、他本にそのあるものは、穩元本にあって無名本にないもの二、無名

本にあって穩元本にないもの四である。これは主として穩元本側の脱漏と思われる。

二、したがって、一の事情から推測できることは、穩元本が無名本を、または無名本が穩元本を底本としたのではなく、穩元・無名の両本が、時と筆者を異にして写本されたということであり、両本の間に特に関連があったとは考えがたいということである。

三、穩元本は成立間もない新政権への提出文書という性格上、皇室に関する字句には特に意を払った形跡がある。当時の時流であった急激な王権の伸長に戸惑いながら、教養人の筆者——恐らくは穩元師自身——が苦慮しながら原本にない加筆を行なったであろうことは推察にかたくない。

例えば無名本には「神武、仲哀、応神」とあるも、穩元本では「神武、仲哀、応神天皇」となっており、無名本に「聖德太子」とあるところを穩元本が「聖德皇太子」としているがごときである。

四、無名本には穩元本にない「追加」の部分がある。そして「追加」の末尾には、この縁起の起草者と思われる当山十六世玄澄の名が記され、元禄九年四月九日と

いう記年も見られる。縁起起草の年次を推す手懸りはこの個所において他にないのであるから、無名本の資料的価値は絶大といわねばならない。

両本の比較についていえることは、およそ以上のとおりである。両本を通じて思うことは、この両本の底本となった文書は、その文体から推して、まさしく記年のとおり元禄年間、江戸中期の作であるということである。

使用されている文体は、当時盛行を見たという漢字文であり、所懐を漢字で表記しているが、いわゆる漢文ではない。それは、中国古典の文法に即して構文されているのではなく、いわば漢字による倭文である。しか

し、当時の文章としてはよく整備されており、読み下しはさほど困難ではない。ただ無名本末尾にある追加部分は後代の加筆と思われるものであり、文意やや晦渋である。この部分の読解については今後の教示に俟つものである。

写本とはいいながら両本が保存されていたことは、まことに奇特なことであった。思うに一本のみでは脱漏は永久に補われず、誤謬は正すに由がない。しかし、幸いにも二本が伝わったため一の欠缺を他が補い、他の誤謬を一が正しているのである。光誉開山の真説は、期せずしてその間に窺えるといえるのではあるまいか。

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施〕
〔浄土〕四十五巻・四月号以降

皆様の暖かいご協力をいただいて、年会費の値上げを断行しました弊会も、ようやく新しい歩みをはじめた次第です。どうか今後共、末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(空三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

藤原定家は嫉妬した。

式子内親王の心を、掴んだにちがいない九条良経の存在が限りなくおぞましいのである。

そのころの式子はすでに四十の坂を深々と越えている。良経は三十前の若い公達だ。兩人の仲を疑ぐって嫉妬の炎(はむら)で身を焦がしている定家自身もまた四十男であった。

性愛とは無縁な世界であらう。歌の情感だけで支えられた虚空の出来事である。

だが俗っ気の強い定家には、たまらなかった。無心で

その虚空へ飛びこんでゆけぬ自身を知っているだけに、なおさらである。

式子の歌境が強烈な恋心へ集中しはじめたとき、定家はまずその相手を詮索した。じきに「八重桜の相聞歌」からライバルの正体を知った。

ライバル、とは言うが定家自身、式子を恋うていたのかどうか。おそらく相聞歌に触発された造型感情であらう。芸術上の嫉妬が定家の気づかぬところで恋の嫉妬にすり替えられている。

秋の夕暮れどき、大炊御殿に参じた定家に式子は近作だと言って一首を示した。

恋ひ恋ひてそなたに靡く煙あらば

云ひし契の果てとながめよ

定家はいつものように、式子の師匠らしく窮屈な姿勢で作歌の批評をした。これはすでに長い習慣だった。聴き入る式子も生硬な態度を崩さない。

二人のあいだには長年にわたって、このような距離がたもたれてきたのであった。

しかし、今宵の定家は即座に一首をしたためて式子に手渡した。

恋ひ恋ひてあふともなしに燃えまざる

胸のけぶりや空にみゆらむ

反応を、定家は待った。

二度三度と口ずさんだ式子は、じっと定家の顔を見つめてきた。

すでに髪は白く、それも脱毛症がひどくてシミだらけな地肌が浮いてみえる。近ごろ病みはじめた奇病で式子の顔面は左半分が腫く腫れあがっていた。

前号のあらすじ

『新古今集』の大歌人藤原定家。この人もまた、吹きまくる専修念仏の嵐の中で苦悩する知識人だった。ただ定家は、後鳥羽院への配慮からみずから小心者に成り下がって、時の政治や宗教から傍観するより仕方なかったのである。そして彼の妻までが恋い慕う天才歌人九条良経。もちろん法然上人の庇護者九条兼実の息である。その良経は今、後白河法皇の内親王式子に心を寄せている。自分よりも十歳以上も離れたこの女人へ、良経は世をはかなんだ若き心を傾けるのである。それはあたかも定家が、ある時期に七歳年上の卿二位兼子に熱情をたぎらせたのにも酷似していた。そしてこうした宮廷貴族の日常生活世界にも、「南無阿弥陀仏」の念仏信仰は深く浸透し、現に式子内親王その人もまたすでに念仏への信心に生きていたのである。

だが眸だけが妙に澄んでいた。知性と気品を微塵も失わぬ眼光で定家を射すくめる。

「これ、定家どのお気持ですか」

冷めたい声が投げかけられた。

「嘘いつわりのない気持です」

定家はやや狼狽気味に答える。

「ちがいます」

「ちがうとは？」

＜謡曲「定家」＞



「同じ恋ひ恋ひてでも、わたくしのそれと、あなたの恋ひ恋ひてとは、全くちがうのです」

「どうちがうのですか。九条の若君とわたしと……」

「何をおっしゃいますか。良経殿下なぞ何の関係もございません」

「姫君は誰を恋ひ恋ひていらっしゃるのですか」

「定家どの、わたくしの顔をよく御覧なさい。ふた目と見られない醜女になり果てています。しかも病んで、老いています。人の世の恋が出来る身とお思いですか」

「いや歌心は永遠です。顔かたちに関係はありません」

「ほほ、定家どのはまだお若いわ。現世を生き抜くお力も、希望も充分に持ち合わせていらっしゃる」

「現世を生き抜く……」

「そうです。わたくしが今、恋ひ恋ひているのは仏さまです。なつかしくも慈悲深い阿弥陀如来さまなのです。ここで詠んだ契とは、殿ごとの約束ではございません。阿弥陀さまとのあいだで交わしたお誓いです」

「阿弥陀如来とのあいだで交わした契りですか」

定家にはとらえがたい世界だったかも知れない。

後世になって創作された謡曲「定家」は、藤原定家の

式子内親王への愛執妄念を描き上げたものである。

式子が賀茂齊院から退下してきたころ、定家は彼女に恋の思いを打ち明ける。

歎くとも恋ふともあはん道やなき

君葛城の峰の白雲

ところが式子にはべもなく突き放す。そのにべもなくが「その御つらにてや」なのである。そのご面相で若い女性を口説こうなどは、である。さらに歌に託して、

さればこそ夜とは契れ葛城の

神もわが身も同じ心に

と拒絶する。

この謡曲、事実性は全く稀薄である。式子内親王が賀茂の齊院を退下したのは十七歳前後で娘盛りであったが、藤原定家は残念ながら未だ八歳の童子だったのである。

謡曲は、舞台を北嵯峨の時雨亭に設定する。そこに苦

むした墓があった。墓石は一杯の蔦カズラでおおわれている。

通りかかった旅僧が俄か雨に遇い、時雨亭で雨やみを待っていると、一人の老女が現れる。墓の由来を語りはじめる。

この墓は式子内親王のものだ。生前、彼女に言い寄った藤原定家は思いを遂げぬまま死別してしまった。やがて定家も死んだが、愛執妄念は蔦カズラとなって式子の墓石に巻きついているという。

「私は式子の亡魂です。早く蔦カズラに巻きつかれた苦しみから解放して下さい」

と、老女は旅僧に頼みこむ。

僧の説経で、墓石の蔦カズラは涙が溶け落ちるように消えた。

式子はそので旅僧へ感謝をこめて舞いを舞う。

舞いのさなか、老女の姿は煙りのように何処かえ消え失せてしまった。

夢のまぎれに墓の底へ……帰ったのであろう。

雨もやんで旅僧は時雨亭を出る。式子の墓をふりかえったとき、石塔には前のように蔦カズラが抱きしめるよ

うに巻きついていた。

かりにゆう庵も雪にうづもれて

尋ねぞわぶるもずのくさぐさ

——定家

たずねればそこもいはずなりにけり

頼めぬ野辺のもずのくさぐさ

——式子

こんな同質同型の歌のやりとりが謡曲「定家」をうんだのであろう。

いかにも荒唐無稽なフィクションに思われるが、歌の師弟という関係も踏んまえて、彼らが生きた軌跡を推量しなくてはなるまい。

色恋とは全く異質な熱情で阿弥陀如来を思慕しつくした式子内親王。

法然思想の核に、これまでの呪術的な阿弥陀仏のイメージから、生ま生ましい情感をかよわせた「思慕仏」への発展飛躍があった事実も見落してはならない。

二

法然の和語燈録に「正如房へつかわした手紙」がある。

この正如房が式子内親王の承如房と同一人物かどうか。確定資料はない。しかし推定資料はふんだんにある。

建久九年の四月八日付で、法然は死期が迫ったのを感じたか、それとも専修念仏への断崖を直感してか、「没後起請文」を書いている。遺書である。こと細かに遺品分けをする。

そのなかに円親の項でこんな一文がある。

吉水東新房、是レ円親大徳ノ所領ナリ。是レ本主ハ故六条ノ尼公。其ノ養子ト為リテ付属ス

吉水の東新房とは、法然が常住した禪堂の一房にちがいない。近年門弟がふえ増築した分を指したものであるう。

内弟子だった円親は、近年発見された奈良興善寺の法然書簡にもその名があるので、実在人物であることは間

違いない。ただし出自や行蹟は全く不詳である。

正源明義抄で讃岐流罪に随行した十二人の門弟のなかに円信という名前がある。九条兼実の落胤で、比叡山にいたが、やがて離山して御室へゆき、少将の堅者と名乗った。さらに法然門へ参じた、という記載がある。

正源明義抄には不安定な記述が多いが、円信が円親だとすると、彼に関する唯一つの記述だ。

兼実の落胤説は信用出来ぬにしても御室の仁和寺へいって「少将の堅者」を名乗ったという記載には魅かれる。続く故六条尼公とかかわってくるからである。

故六条尼公は後白河法皇の中宮で、以仁王や殷富門院亮子、さらに式子内親王を生んだ高倉三位成子ではないであろうか。法皇が崩御するまで彼女たちは六条西洞院宮に住んでいたのである。

高倉三位は王皇后と呼ばれて然るべき女性だったが、以仁王の一件などもあり、法皇の寵が高階栄子に移ったこともあり、ひっそりと世を忍んで暮らしたのであらう。

ところで同じ成子が生んだ以仁王の弟息子が守覚親王である。出家して仁和寺の喜多院にいた。その法傘に属

した円信（円親）も何らかの血縁者だったのであらう。養子ト為リテ云々や円親大徳の呼称が、それを感じさせる。

想像を飛躍させると、落胤説は九条兼実ではなくて以仁王の隠し子だったとも考えられる。

以仁王には八条院三位局との間に一男一女がいた。しかし他にも奈良ノ方との間に若宮を儲けたり、民部少輔忠成の娘にも男児を生ませている。前者は北陸で育てられ、やがて木曾義仲に擁されて京都へ現れている。後鳥羽帝と皇位継承を争った木曾宮である。また忠成の娘との間に出来た常興寺ノ宮は後に天台座主となった。

こうした氏素姓の正しい落胤以外に日かげの隠し子も実在したのではなからうか。それを九条兼実の落胤と伝え誤まった「正源明義抄」は以仁王の正妻八条院三位局の運命にまどわされての憶説か、とも思える。この女性是以仁王の死後、兼実と結ばれ良輔たちを生み落しているからである。

式子が落飾出家したのは建久六年である。仁和寺にいる異母弟の道法法親王を戒師とし、実兄の守覚法親王が介添えだった。それ以前に姉の亮子（殷富門院）も同じ形

式で出家している。

法然諸伝は亮子の出家を法然の授戒による、とするがそこまで断定は出来ぬにしても高倉三位の遺子たちが強くかわつていたことは推定に難くない。母の高倉三位自身が三条家の出、西園寺実宗の本家筋にあたる。

仁和寺の喜多院から法然門へ参じたであろう円親大徳。さらに吉水の東新房はほんらい六条尼公の所有だとする。

その六条御殿は文治四年（一一八八）の四月十三日に焼亡した。後白河法皇が熊野へ参詣した留守の出来事である。ただちに再興を源頼朝が引受けて造営にかかる。

焼亡とは言っても全焼ではなかったのではあるまいか。高倉三位が住んでいた部分は焼け残り、新築に際してその建物を東山吉水の法然禅房へ下げ渡したのかも知れない。円親大徳の所領の論拠でもあろうか。

あれやこれやで式子内親王と法然は強縁でつながり、しかも「正如房に与える手紙」という決定的な文章までが実在している。

さて、その手紙の内容だが水々しい情感があふれている。法然の諸書簡では全く異色である。

正如房の御事こそ、かえすがえすもあさましく候へ。そののちは心ならず、うときようになりまいらせて、念仏の御信も如何かとゆかしく思ひまいらせ候つれども、さしたる事も候わず。又申すべき便りも候わぬようにて、思いながら何となく空しくまかり過ぎ候いつるに、ただれいならぬ御事、大事になどばかりうけたまわり候わんだにも今一度見まいらせたく、おわりまでの御念仏の事も、おぼつかなく、こそ思ひまいらせ候へきに、まして御心にかけて、つねに御たずね候らんこそまことにあわれにも心苦しくも思ひまいらせ候へ

こんな文章で書き起こされる。

御無沙汰を詫び、正如房が重病と聞いて驚いている様子もうかがえる。同時にこの書簡の相手が、ちよつと立ち寄って具合を見てくるような人でないことが判る。高貴な身分である。

ところで正如房式子の病氣だが、書簡が正治元年か二年（一一九一—二〇〇）とすると、死の直前にあたる。彼女は翌建仁元年（一二〇一）の正月二十五日に薨じてい

るのである。彼女は正治元年の夏ごろから発熱状態が続
き、乳房や脚などに浮腫が出始める。俗にいう脚氣（カ
ッケ）であらうか。

情感があふれた書簡、と書いたのは次のような文章が
続くからである。

左右なくうけ給はり候ままに、参り候て見まいら
せたく候へども、思ひきりてしばし出ありき候は
で、念仏申し候ははやと思ひはじめたる事の候を、
様にこそよる事にて候へ。これをば退しても参る
べき候に、又思ひ候へば、詮じてはこの世の見参
はとてもかくても候なん。屍を執するまどひにも
なり候ひぬべし。誰とてもとまりはつべき身には
候はず。我も人も唯おくれ先立つかはり目にてこ
そ候へ。その絶え間を思ひ候と又いつまでぞと定
めなき上に、たとひ久しと申候とも夢まぼろし幾
ほどかは候へきなれば、唯かまへてかまへて同じ
仏の国に参り逢ひて、はちすの上にてこの世のい
ふせさをもはるけ、共に過去の因縁をも語り、互
いに未来の化揚をも助けんことこそ返す返すも詮

にて候べきと始めよりも申しおき候しか。返す
返すも本願を取りつめまいらせて一念も疑う御心
なく、一声も南無阿弥陀仏と申せば、わが身はた
とひ罪深くとも仏の願力によりて、一定往生する
ぞと思し召して。よくよく一寸ちに念仏し候へき
也

意識をしてみれば、こんな文意となる。

右願左弁することなく、仰せのとおりに参上しお逢い
したいのですが、このところ一切他出は中止し念仏だけ
を申していようと決心したのです。しかし、あなたの病
状如何ではこの決心も変更して駆けつけようかと考えま
した。でも又、思いまするにこの世で相い逢うことは、
やはり無益な行為でありましょう。死屍に取りすがって
嘆く結果になり兼ねませぬ。人間誰もが永遠に生き残れ
る身ではありません。どちらが先にあの世へ旅立つかの
違いぐらいです。その時間差もどれほどのものでもあり
ません。夢まぼろしの如き短い間のことであります。だ
から必ず間違はなく仏の国へお互いに到達することが出
来て、そこで再会し、蓮の上で現世のうさを晴らし、共

に過去の思い出を語り、未来の教化高揚（化揚）に一助を尽してこそ、ほんとうの為すべきことだ、と兼々申上げておられるとございませう。今はただ仏の本願を心からお信じになつて一念も疑うことなく、一声でも南無阿彌陀仏と唱えれば、わが身は罪深くとも阿彌陀仏の願力によって間違ひなく往生出来ると信じて、ひとすじにお念仏をなさいませ。

三

この部分を読むと、正如房の側から法然に来て欲しい、逢いたい、というアプローチがあったことが判明する。しかも以前から「心の師」でもあったようだ。

さらに正如房が法然を求めた目的の一つに、仏法についてさまざまな雑音が吹き込まれていたことも、あとの文章から推量できる。

ただ十声、一声の念仏にて往生はし候へ。まことに仏の本願の力ならでは、いかでかざる事候べきとおぼえ候。本願空しからずという事はこれにても信じつべくこそ候へ。これはまさしく仏説に

て候。仏の御言葉は一言もあやまらず申し候へば、ただ仰ぎて信すべきにて候。これを疑はば仏の御空ごとと申すにもなりぬべき候。かへりては又その罪も候ひぬべしとこそおぼえ候へ。深く信じさせ給ふべく候。さて往生させおはしますじきやうにのみ申しきかせまいらする人々の候らんこそ返す返すも浅ましく心苦しき候へ。いかなる智者、めでたき人々とおせらるることも、それになお驚かせおはしまし候ぞ。おのおの道にはめでたく貴き人なりとも悟り、ことに行異なる人の申す候ことは、往生のためにはなかなかゆゆしき退縁、悪知識とも申すべき事どもにて候

浄土に往生する道が、念仏を唱えることだけだ、と法然は強調している。しかもこの教えは仏教の正統であつて「これはまさしく仏説にて候」なのである。

正如房の周辺で、それは正ししい往生のあり方ではない、と吹き込んでいる人があるらしいが「返す返すも浅ましく、心苦しいことです」と法然は言い切る。どんな智者、立派な人々の言うことでも、それに驚かされては

いけない、それぞれの専門分野ではすぐれて貴い人であっても、悟りについて、とりわけ行において異なる人の言うことは、かえって仏縁から遠ざかり、悪い教えたと思われるべきだ、ともきめつける。そして「悟り異なる人の往生言い妨げんによりて、一念も疑ふ心あるべからずという理（ことはり）は、善導和尚のよくよく細かにおぼせられおきたる事にて候也」と善導教義の正当性を法然は強調した。

法然の善導大師への傾倒ぶりは、次の文章で最高潮に達する。

いかにもめでたき人と申すとも、善導和尚にまさりて往生の道を知りたらん事もかたく候。善導は又凡夫にあらず、阿弥陀仏の化身也。阿弥陀仏のわが本願をひろめて衆生を往生せさせむ料にかりに人と生まれ善導とは申す候也。その教へは申さば仏説にてこそ候へ。あなかしこ、あなかしこ。疑ひおぼしめすまじきにて候

阿弥陀仏が、わが本願を弘めて、衆生を往生させる目

的で、かりに人間して生まれてきたお方が善導大師なのです、と断言している。

さて書簡の終盤では、法然の正如房への深い愛の言葉のようなものすら読み取れるのである。

うけ給はる如くは、このたびまことに生立たせおはしますにても、又思はずに生立ちまいらせ候事になる運命（さだめ）なきにて候とも、ついに一仏浄土に参り、逢ひまいらせ候はんは疑ひなくおぼえ候。夢まぼろしのこの世にて今一度などと思ひ候事は、とてもかくても候ひなん。これおば一筋におぼしめしすて、いとも深く願ふ御心をまし

正如房から法然へもたらされた便りには、すでに自分の命終近きことを明言しているらしい。そううけたまわったように、ほんとうにあなたが先立うとも、また意外にも自分が先になる運命であろうとも、お互いに一仏浄土（阿弥陀仏のいます西方浄土）へいってお逢い出来ることをお疑いなさいませんように。夢まぼろしのこの世でも

う一度逢いたいなどと思われてはいけません。

と、まるで愛人との死別へ贈るような言葉ではないか。

夢まぼろしの現世で、もう一度逢おうなど考えるな。お浄土で、どちらが先になろうとも、相手を待って再会しましょう、というのである。

いったいこれまで法然と正如房、式子内親王との間でどのような因縁が結ばれていたものであろうか。

資料は全くない。われわれはこの書簡から匂う香気のなかに、仏をとおして結ばれた男女の純愛を嗅ぎ取るだけである。その男女も、いわゆる雄と雌とではあり得ない。純粋な人間同士の透明な関係である。

透明な愛は、結びの暖かい心ずかいで、いやましにひもとく者の眼を洗ってくれる。

もしのどかに聞かせおはしまして、一念も御心を進むる便りにやなり候と思ひ候ばかりに、とどめえ候はで、これほど細かになり候ぬ。機嫌を知り候はねば、はからひ難くてわびしくこそ候へ。もし無下に弱くならせおはしましたる御事にて候は

ば、これは事長く候べく候。要をとりて伝え参らせおはしますべく候。うけ給り候ままだに何となくあはれにおぼえ候て、おし返し又申す候也

もしものどかな気分でお聞きになれて、一念でも多くお念仏を唱えて頂く便りになるのでは、と思ったばかりに筆が止まらず、こんなにくわしく書いてしまいました。ご気分がどうかかわかりませんので、もどかしく思っただけです。もし非常に御容態が悪いのでしたら、この手紙は長すぎることでしょう。近侍の人が要点だけを取ってお伝えしてあげてください。お申越しのままで如何にも情しいことにおぼえてなりません。くり返しましたお便りをさし上げましょう。

病んだ貴人への書簡であることが、この一文からも容易に察し得るであらう。

最後に、この正如房、やはり式子内親王とは別人ではあるまいか、と疑念をいだく者は歌人式子の作品に欣求浄土を詠んだものがないという点を論拠とするにちがいない。しかし式子が晩年に及んで憑かれたように歌いあげたほ歌を、その憧憬した異性を救済の阿弥陀如来と置

＜阿弥陀如来来迎図＞



き換えて味わったとき、疑念は一掃されるはずである。

つかの間の闇もうつつもまだ知らぬ

夢より夢にまどひぬるかな

君ゆえや始めも果ても限りなき

うき世をめぐる身ともなりなむ

君は、来迎します阿弥陀如来であり、夢こそは憧憬の西方浄土の幻想図であったことであろう。

最終晩年の一首。

暁のゆふつけ鳥ぞあはれなる

長きねぶりを思ふ枕に

薄幸なゆふつけ鳥は正治三年の正月二十五日に生涯を閉じた。五十二歳だったと推定される。奇しくも十一年後に入寂した法然と同じ月、同じ日であった。

(つづく)

二 編集後記 二

○七月。東京地方ではまた盂蘭盆の時節がやってきた。宗教ブームとか仏教ブームという前に、おぼんの行事はまことに日本人のゆかしい伝統習俗として、近時は一般の関心が、むしろ比較的高まっている感さえる。もちろんその担い手は、一家の年寄りが中心とはいえ、お墓まいり、お寺まいりには子供たちも含めて、若い世代も決して少ないとはいえないのである。やはり身近な先祖の在りし日の想い出はなつかしく、おぼん行事の風情に借りて、心からの供養をするものであらう。そしてそうした心差しをこめて、この七月から八月にかけての暑中休暇、蔽入り休暇は、遠くふるさとを離れて生活する人々をいやが上にも帰省させるのである。しかもその心の在所は、「郷愁」というものは、決して風景や自然に対するものではなく、人間に対するものだ」(高木彬光『白昼の死角』より)と

いう言葉の通り、ふるさとの父、母、兄弟、友人達あるいは今は亡き親族や知人に向けてあるわけである。

七月や既にたのしき草の丈
胸はりて水着の娘雲の峰
草城 立子

○ところで、弊会の事務所へも宗門の関係者の方々の出版物を二、三送っていただいているが、最近では石井俊瑞翁(東京・小石川真珠院住職)の随想集『人間の生涯を憶う』(隆文館刊、定価一五〇〇円)が目にとまった。ある部分、哲学的な難解な模索があるが、ともかく人間の一生のあり方を仏教教義の諸概念と対応させた構成はなかなかユニークである。第一章から第六章まで順に、「生有、本有、死有、中有、当有、憶いを再び現世に戻し」と題された展開は、その内容の一々の章題と併せて、まことに独創的である。この本の詳しい紹介は別の機会に譲るとして、ともかく興味ある方にお知らせしたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十四年六月二十五日

昭和五十四年七月 一日

印刷

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

=好評発売中=

大正大学名誉教授 中村康隆著

『宗 教 学 小 論 集』

—天の饗宴と地上の饗宴—

A 5 判 266頁 上製函入 定価 4,000 円

◎永年に渡り、宗教学、宗教社会学、仏教民俗学などの分野で研鑽を積んでこられた著者の広汎な学術論文集の待望の新刊。

発行 国書刊行会

〒 170

東京都豊島区巢鴨 3-5-18

振替 (東京) 5-6 5 2 0 9

■念仏信仰和訳宝典三部作■

『和 訳 法 然 上 人 選 択 集』村瀬秀雄訳著

B 6 判 387頁 上製函入 定価 2,500 円

『和 訳 善 導 大 師 観 經 四 帖 疏』村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。

万人必読の和文聖典です。

発行 常 念 寺

〒 256

小田原市国府津 5-14-49

振 替 (横浜) 8 2 9 6

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋 1-11-6

振 替 (東京) 8-8 2 1 8 7